

# 公共図書館における マルチメディアDAISY図書の活用

墨田区立ひきふね図書館  
山内 薫

## ガイドヘルパーと一緒に本を 読むための部屋を貸してほしい

2013年の4月、あずま図書館と寺島図書館が統合して、墨田区立ひきふね図書館が開館しました。駅前にある高層マンションの2階から5階までが図書館になっています。そして、その4階には、3つのテーブルと6脚の椅子のある、ちょっとした打ち合わせができる「障がい者サービスルーム」という部屋ができました。

開館して半年ほどした頃、知的な障害のあるNさんとそのガイドヘルパーが来館し、部屋を貸してほしいと希望されました。Nさんは29歳の女性で、愛の手帳2度とのことでした。

愛の手帳の2度というのは、「知能指数(IQ)がおおむね20から34で、社会生活をするには、個別的な援助が必要となります。例えば、読み書きや計算は不得手ですが、単純な会話はできます。生活習慣になっていることであれば、言葉での指示を理解し、ごく身近なことについては、身

振りや二語文程度の短い言葉で自ら表現することができます。日常生活では、個別的援助を必要とすることが多くなります」<sup>(1)</sup>というかなり重度の知的障害です。

Nさんの場合、来館はもとより、一人で読みたい資料や見たい資料を図書館で見つけることがむずかしいので、ガイドヘルパーの援助を受けながら、雑誌の写真などを二人で一緒に見るために部屋を貸してほしいということでした。

新しい図書館の座席はほとんどが予約制になっていて、その他の席も一人で利用することしか想定していないため、二人で会話を交えながら資料を利用する席は用意されていないのです。

そこで、障がい者サービスルームを使っていただくことにしました。部屋を覗いてみると、東京スカイツリーの本を机に広げて、そこに載っている写真をガイドヘルパーと一緒に見ていました。

Nさんは猫が好きだということをガイドヘルパーから聞いていたので、良い機会だと思い、伊藤忠記念財団からいただいた『いきもの超ひゃっか③ ねこ』のマルチメディアDAISYを、部屋に持ち込んだパソコンで見てもらいました。

Nさんはしばらくは見ていたものの、すぐに飽きてしまったようでした。ガイドヘルパーによれば、やはり動画でない集中して見るのはむずかしいということで、その日は1時間あまりその部屋で、雑誌などの写真を見て帰られました。

## マルチメディアDAISYを見ながら会話が弾む

数週間後、同じガイドヘルパーと一緒に、別の女性（Sさん）が図書館を訪れました。Sさんは20代の前半で、以前墨田福祉作業所という区営の知的障害者通所授産施設で働いていました。墨田福祉作業所へは毎月1回図書館が出かけに行って、出張貸出をしています。毎回20人ほどの人が本やCDを借りてくださっていて、Sさんも借りてくださっていました。

Sさんはその後高齢者施設への就職が決まり、墨田福祉作業所を退所したそうです。

彼女は犬が好きだと聞いていたの

で、前回と同じように、パソコンとマルチメディアDAISYを部屋に持ち込んで『いきもの超ひゃっか② いぬ』を見てもらいましたが、最後まで興味深く、私やガイドヘルパーと会話しながら見てくれました。

Sさんはダウン症で軽度の知的障害なので、マルチメディアDAISYを見ながら会話も弾みました。ただ、彼女は腎機能に障害があるので、定期的にトイレに行かなくてはなりませんでした。

## 「今日は図書館に行くんだ」

その後、今度は部屋を利用したいというTさんが予約してきました。Tさんは、25歳の男性でNさんの弟です。今まで同行してきたガイドヘルパーは女性でしたが、利用者が男性なのでガイドヘルパーも男性でした。

Tさんも愛の手帳2度で、会話によるコミュニケーションはむずかしそうでしたが、ガイドヘルパーの言うことはよくわかるようでした。ガイドヘルパーの話によると、午前中から「今日は図書館に行くんだ」と楽しみにしていたそうです。

今回も障がい者サービスルームに、パソコンとマルチメディアDAISYを用意しました。Tさんは相撲が好きで、とくに把瑠都のファンだと聞いて

ていましたので、「わいわい文庫」バージョンブルーの中の『おすもうのいろは』を見てもらいました。このマルチメディアDAISYの最初の画像に、把瑠都が登場します。

しかし、『おすもうのいろは』は、写真と音声だけなので、残念ながらあまり関心を示してもらえませんでした。

彼は薬を服用していて、ちょうど午後3時が服用する時間でしたが、飲んだ後はとてもだるそうでした。本やマルチメディアDAISYを見る状況ではないようだったので、CDプレーヤーと『NHKみんなのうた40周年』というCDを持ってきて、小さな音でかけたところ耳を傾けてくださいました。ガイドヘルパーによれば、自傷行為や興奮を抑えるための向精神薬を一日何回か服用しているとのことでした。

## スウェーデンの「読書指導員プロジェクト」

最近の図書館の利用例のように、自力で図書館に来館したり、資料を見たり読んだりすることが困難な人にとっては、それを援助してくれる人の存在が不可欠です。

たまたま今回の事例では、移動支援事業のガイドヘルパーがその役割を果たしていただきましたが、ス

ウェーデンではそのような知的障害や認知障害のある人をサポートする読書指導員プロジェクトというのがあるそうです。

「読書指導員プロジェクトは、スウェーデン読みやすい図書センターとスウェーデン全国知的障害者協会によって、1992年に始められた。現在、スウェーデン国内のほとんどすべてのデイケアセンターと多くのグループホームには、読み聞かせの会、読書会、図書館訪問などを担当する読書指導員が一人または二人いる。スウェーデンのすべての州では、知的障害のある人々の介護者で、読書指導員としての研修を受けた人々が運営する勉強会が開かれている。最近では認知症を対象とした同様な読書会も開かれている。」<sup>(2)</sup>

日本の図書館でもガイドヘルパーの方たちと協力するなどして、知的障害や認知症の方の図書館利用を進めていくことができないでしょうか。

その際の有効な資料として、マルチメディアDAISY図書が活用できるでしょう。墨田区の図書館でも毎月発行している図書館ニュース（2013年11月号）でマルチメディアDAISY図書のPRを行いました。



## マルチメディアDAISY図書を利用してみませんか？



### ディスレクシアとは？

昨年10/17の朝日新聞に「スビルバーグ監督の学習障害って？」という記事が載っていました。映画監督のステファン・スビルバーグが学習障害であることを告白したというのです。彼の学習障害は「ディスレクシア」といわれ、視力や聴力には問題がないのに文字の読み書きが困難な障害です。俳優のトム・クルーズもまた「ディスレクシア」のため、脚本を誰かに読んでもらってセリフを覚えていました。つまり文字を誰かに読んでもらえば理解できるのです。

### 著作権法の改正

2010年に改正著作権法が施行され、従来は視覚障害者だけに認められていた本の音声利用が、発達障害・学習障害・知的障害者、さらに高齢者など「視覚による表現の認識に障害のある者」（著作権法第37条第3項）すべてに認められるようになりました。こうした人のための画期的な資料が「マルチメディア DAISY (デージー) 図書」です。これは、パソコンの画面上に文や絵、写真が表示され、音声で読み上げてくれるというものです。読んでいる部分にはハイライトが当たり、どこを読んでいるかを示します。これによってディスレクシアの人は無理なく文章が読め、理解が進みます。また自力で文章を読めない知的障害の方なども本を楽しめるのです。

### 図書館での取り組み

ひきふね図書館には、日本障害者リハビリテーション協会で作成された60タイトルと伊藤忠記念財団から寄贈していただいた127タイトルのマルチメディア DAISY 図書があります。著作権法上、誰でも自由に利用することはできませんが、何らかの理由で普通の本が読めない、読みにくいという方はぜひ、障害者サービス担当までご相談ください。また、マルチメディア DAISY 図書の中は著作権者の了解を得ることでもご利用できるものが21タイトル含まれていますので、ご覧になりたい方は是非お申し出てください。

### 最近の調査など

前述の記事によると、日本の小学生で読み書きの困難な子供は8%いるということです。これは各クラスに3人近くいるという計算になります。本人はもとより、親や先生など周囲の大人もディスレクシアに気づいていない場合も多いでしょう。読み書きが苦手というお子さんに一度、このマルチメディア DAISY 図書を見ていただければと思います。なお、マルチメディア DAISY の利用に関する報告書がネットで見られますので、興味のある方は是非ご覧ください。〈『デージー活用事例集』(日本障害者リハビリテーション協会 [http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/daisy/2012\\_usecase/](http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/daisy/2012_usecase/))、『マルチメディア DAISY 図書 わいわい文庫活用術』(伊藤忠記念財団) ([http://itc-zaidan.or.jp/ebook\\_case-study.html](http://itc-zaidan.or.jp/ebook_case-study.html))



今のところ数件の問い合わせがあっただけで、今後、学校や障害者施設などにも積極的に働きかけて、資料を活用していきたいと考えています。

注：

(1)東京都福祉保健局東京都心身障害者福祉センターのホームページより ([http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shinsho/a\\_techou/](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shinsho/a_techou/))

(2)『読みやすい図書のためのIFLA指針(ガイドライン)』(野村美佐子、ギッタ・スカット・ニールセン、プロール・トロンバッケ編 日本障害者リハビリテーション協会訳 日本図書館協会 2012)